

山一証券自主廃業をめぐる 新聞投書にみるジェンダー

熊 谷 滋 子

1. なぜ、山一証券自主廃業をめぐる新聞投書か
2. 戦後40年間の投書の文体について
3. 今回の調査方法と結果
4. 戦後40年間の投書の文体との比較
5. 山一証券をめぐる投書の内容の分析
 - (1) 「批判」をめぐるもの
 - (2) 「個人的経験」をめぐるもの
 - (3) 「社員への同情／励まし」をめぐるもの
 - (4) まとめ

おわりに

補足（当事者からの投書）

1. なぜ、山一証券自主廃業をめぐる新聞投書か

まだ生々しい記憶である。1997年11月22日、山一証券自主廃業のニュースが社長の号泣とともに日本全体を駆けめぐった。社員の大半にとっても寝耳に水の事件であったという。日本国内の多くの者が予想もしていなかった、大手証券会社のうちの一角がくずれ、まさにタイタニック号の悲劇を思わせる事態となった。新聞各社は、こぞって、発表直後より、社会面においても、企業の経営破たんに関する、特に山一証券の社員とその家族をめぐる、特集を組むほどであった⁽¹⁾。このことは、山一証券自主廃業が、単なる経済的な事件を表しているだけではなく、社会的な出来事としても認識されていることを示している。それはまたマスメディアとして大きな役割を果たしている新聞各紙の投書欄にはっきりあらわれ、座視できぬ現象として迫ってくるものであった。

本稿では、そのような社会的な出来事を、私がこれまで取り組んできた新聞

投書の調査とそこでの方法をふまえ、また、私の問題関心事でもあるジェンダー視点から、この出来事の社会言語学的意味を明らかにしていくものである⁽²⁾。ついでには、それに先がけ、先行する二氏の新聞投書に関する研究を簡単にでも概観しておきたい。

国緒英子(1987)は、投書の内容を4つに分類し、特に、その中で、意見主張タイプは男性の投書に、随筆タイプは女性の投書に多くみられると述べている。また、男性の投書には、抽象的な表現や、かたい表現が使われ、一方、女性の投書には、具体的で、バラエティに富んだ表現が使われていると指摘している。このように、投書において、男女差がみられると確認している。

佐竹久仁子(1995)は、国緒の研究をふまえ、さらに、調査項目を増やし、より広範囲に、より緻密に投書の分析を試みている。その上で、投稿者の取り上げていた項目についてみると、女性では特に、私的なテーマのものが多く、男性の投書には公的なテーマのものが多く、「政治や社会は男の領域、家庭や日常生活は女の領域」という通念が成立しているのではないかと、佐竹は結論している⁽³⁾。今回の山一証券自主廃業という出来事自体は、佐竹のことばで言えば、公的なテーマに入るものだろうが、約7,500名の社員の解雇による、家族への影響を想像すれば、私的なテーマにも展開していくものと考えられた。案の定、新聞の社会面での特集がそのことを物語っていた。

本稿は、以上の二氏の研究をふまえながらも、さらにジェンダー視点から投書内容に立ち入って積極的に考察していこうとするものである。すなわち、投書文の表現の性別上の特徴がどうであるか、あるいは、投書のテーマが私的か公的か、という調査にとどまらず、投書内容のなかにジェンダー上の問題がいかに表れているか、どう読みとれるか、この点にも焦点をあてていきたいと考えている。さらに、もう一点、本稿の特徴をのべておくなら、私が取り組んできた戦後40年間(1955年～1995年)の新聞投書の文体の変遷の歴史のなかで、今回の調査結果の意味づけも行なってみよう。

2. 戦後40年間の投書の文体について

そこで、山一証券自主廃業をめぐる投書の分析に入る前に、煩瑣になるかもしれないが、かつて行なった調査について、本稿のテーマにかかわるかぎりで紹介してみたい。そこでは、『朝日』を対象に、戦後40年間(10年ごとに、10月-ヵ月分のみ)の投書を、ジェンダーの視点から検討している⁽⁴⁾。調査す

る上で参考にした佐竹(1995)では、『朝日』『毎日』『読売』の3紙に掲載された1995年度の2ヵ月分の投書に限定して、細かく項目をたてて、分析を行なっている。詳しくは、佐竹(1995)にゆずるが、結論として、前述したように、傾向的な男女差がみられたということである。

拙稿(1996)では、佐竹(1995)の調査した項目のなかから、女性の投書にもっとも頻繁に使用されているものを選びだし、4項目(「私」、「思う」、丁寧体、身内への言及)に絞りこんで調査している。また、調査対象の時期を拡げ、戦後の社会状況が投書にどのように反映していたかについても考察している。ここで絞りこんだ項目について、簡単に説明しておきたい。まず、「私」「思う」という語彙の使用について、よく論文を書く際に、また今では大学受験の小論文の指導でも行なわれているらしいが、これらの語彙は、極力避けることとされている。これらを使用すると、主張が弱められ、客観性に欠けると解釈される恐れがあるとされている⁽⁶⁾。

丁寧体の使用については、投書の性別判断調査を通して、ジェンダー認識を文体から探った拙稿(1997)で指摘してきたことだが、丁寧体で書かれる投書は、女性のものとする割合が男女共に高かったという事実裏付けられている⁽⁶⁾。

身内への言及については、「女は内」と言われるように、また、佐竹(1995)にも指摘されているように、女性は家庭のことを、家族や親戚関係のことにふれながら述べていることが少なくない。佐竹(1995:62)では、個人的事情の叙述のうち、「夫、妻、子、孫、母、父」など家族をあらわす語が使われる割合が女性の投書では52.1%、男性の投書では24.2%であると指摘している。

また、さらに、新しい試みとして、以上の4項目全て使用しているものを女らしい文体、全く使用していないものを男らしい文体と仮定して、分析している。ちなみに、本稿の末尾で、女らしい文体、男らしい文体で書かれた、実際の投書を例示してみたので参照されたい。

以上のような項目にそくして40年間の投書を調査したところ、佐竹の調査で指摘された男女差も、戦後史のなかで、縮まってきていることが分かった。以下の表がその調査結果である。それにつけ加え、その後さらに調査したところの、最近の2年間の投書の分析も紹介しておきたい。

表1 戦後40年間の「声」欄にみる移り変り（それぞれ10月の一ヵ月分のみ）

()は%

年度	1955		1965		1975		1985		1995		1996		1997	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
私	34(57.6)	11(64.7)	61(45.5)	22(44.9)	77(48.4)	32(66.9)	61(38.6)	52(53.1)	65(47.4)	49(69.0)	34(29.0)	37(40.6)	30(25.0)	33(34.7)
思う	29(49.2)	9(52.9)	52(38.8)	28(57.1)	63(39.6)	30(62.5)	70(44.3)	55(56.1)	49(35.4)	30(42.3)	49(41.8)	44(48.3)	50(41.6)	61(64.2)
丁寧体	15(25.4)	6(35.4)	34(25.4)	35(71.4)	13(8.1)	17(35.4)	20(12.7)	41(41.8)	22(16.1)	29(40.8)	20(17.0)	37(40.6)	25(20.8)	44(46.3)
身内への言及	0	5(29.0)	8(5.9)	13(26.5)	2(1.3)	17(35.4)	5(3.2)	32(32.7)	6(4.4)	27(38.0)	9(7.6)	32(35.1)	14(11.6)	35(36.8)
①(全てあり)	0	0	1(0.7)	2(4.1)	0	2(4.2)	0	9(9.2)	0	6(8.5)	0	3(3.2)	1(8.0)	6(6.3)
②(全て無し)	11(18.6)	3(17.6)	39(29.1)	4(8.2)	46(28.9)	8(16.7)	45(28.4)	12(12.2)	43(31.4)	8(11.3)	42(35.8)	14(15.3)	41(34.1)	9(9.4)
投書合計	59	17	134	49	159	48	158	98	137	71	117	91	120	95

3. 今回の調査方法と結果

調査対象は、山一証券の自主廃業を発表した翌日の1997年11月23日から12月31日までの『朝日』（「声」）『毎日』（「みんなの広場」）『読売』（「気流」）（いずれも東京版）に掲載された投書のうち、「山一証券」または「大手証券会社の自主廃業・破たん」等の用語が使われているものとした。その他、女性だけが投稿できるものも調べてみたが、あてはまるものは、『朝日』（「ひととき」）に2つあった。なお、その後の投書についても、必要に応じて紹介したい。

山一証券自主廃業関連の投書数は、以下の通りである。

『朝日』	36	(うち 男性	22(61.1%)	女性	14(38.8%)	（「ひととき」での2を含む）
『毎日』	19	(13(68.4%)		6(31.6%)	
『読売』	5	(2(40.0%)		3(60.0%)	

計 60 37(61.6) 23(38.3)

()は男女比

全体として、男性の方が多く投稿しているが、この割合は、戦後40年間の投書の男女比の傾向と一致している。ちなみに、『朝日』でまとめた投書についての

記事（1997年12月31日付）によると、1997年一年間の投稿数と掲載数の男女比は以下のようになっている。

投稿数	男性	22,706(64.2%)	女性	12,655(35.8%)
掲載数	男性	1,341(54.4%)	女性	1,125(45.6%)

今回の投書の男女比は、これまでの傾向とほぼ共通していることが分かる。さらに、確認しておきたいこととして、『朝日』のまとめでも指摘されていたが、女性の投稿が増えているということである。1955年10月一ヵ月分の『朝日』での投書の掲載数(率)が、男性59(77.6%)女性17(22.3%)であったことから実感できるだろう。今回の山一証券自主廃業というテーマは、どちらかという、佐竹の分類では「公的なテーマ」に入ってしまうものだが、女性の投書も多く、性別を問わず、その関心の高さのほどを示してくれるもので、テーマだけからでは、性別の判断はできにくくなっている。

また、投稿者の年齢、及び職業については、以下のようになっている。数値は、投書数である。

年齢	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
男性	0	2	8	5	14	7	1
女性	2	7	7	7	0	0	0

職業	会社員	無職	主婦	その他
男性	8	16	0	13
女性	3	1	18	1

また、投稿について、渦中の山一証券に勤めている当事者からのもの、あるいは、当事者の家族、知人等からのものをみると以下の通りである。

	当事者	当事者の家族、知人
男性	0	1（息子）
女性	1（「ひととき」）	2（主人） 1（母） 2（友人の主人） ⁽⁷⁾

これらの数字からみえてくるのは、男性の投稿者は、60代以降で無職という立場からのものが多く、さらには、当事者としてではなく、第三者として投稿している。一方、女性の場合は、50代までにとどまり、主に30代から50代に集

中し、また、主婦からのものが圧倒的に多い。この年代の立場とすれば、自身の夫が働き盛りであることがよめてくる。さらに、当事者、あるいは、当事者の知人として、投稿する場合が少なくない。ここが、男性の投稿者との違いである。後述するが、当事者として、つまり山一の社員であるということでは、男性が圧倒的にその率が高いだろうし、また、当事者の家族や知人、つまり、当事者の夫であったり、友人の妻という関係はあったはずだが、そのような関係からの投稿が皆無であることは、何かを物語っているように思われる。

4. 戦後 40 年間の投書の文体との比較

前に述べたように、私はこれまで、『朝日』について、戦後 40 年間(1955～1995)の投書をジェンダーとの関わりで調べてきたが、全体的な傾向として、調べた項目「私」、「思う」、丁寧体の使用、身内への言及は、いずれも女性の方がよく使用し、全ての項目を満たす投書は、圧倒的に女性のものが多い。拙稿(1996)では、全ての項目を満たすもの(①)を女らしい文体の典型とし、全ての項目を満たさないもの(②)を男らしい文体の典型と仮定した。しかし、その差も縮まってきており、特に、丁寧体の使用、身内への言及は、男性も行なうようになってきている。1995 年以降になると、このことがはっきり現われている。

今回の投書について、同様に項目ごとに調べた結果は、以下の通りである。今回の場合、全体の投書数が少ないため、割合を示すことについて信憑性が低く思われるかもしれないが、戦後 40 年間の投書との比較のため、参考として割合を提示しておく。

() は%

	男性	女性
私	8(21.6)	12(52.1)
思う	15(40.5)	11(47.8)
丁寧体	3(8.1)	9(39.1)
身内への言及	5(13.5)	10(43.4)
①(全てあり)	1(2.7)	1(4.3)
②(全て無し)	14(37.8)	1(4.3)
計	37	23

全体として、戦後 40 年間の投書傾向と共通し、全ての項目について、女性の投書の方が男性の投書より、出現する率が高いことが分かる。今回の投書では、②の割合について、男性が圧倒的に高く、戦後 40 年間の中でも最も高い数値を示している。丁寧体についても、男性が使用する率が戦後高くなってきているのに比べて、今回の投書では、1975 年当時と同じように低くなっている。今回の出来事では、男らしい文体を男性投稿者がより使用しているということを示している。

一方、女性についてみると、②について、戦後の女性の投書では、増えていく傾向にあったが、今回については、少なく、これまでで最低の数値を示している。また、丁寧体の使用はこれまで通り、女性の方が多く、さらに、身内への言及は、戦後の中で最も高くなっている点でも、女らしい文体を女性投稿者が使用しているということがいえる。ただ、①については、今回、全体の投書数も少ないこともあってか、結果として、男女ともに少ないため（共に 1 つ）、全ての項目を満たすものが女らしい文体の典型であるという仮定は、今回の投書では、はっきりと結論づけることができなかった。

さらに、身内への言及について、みてみたい。身内への言及は、戦後 40 年間との比較において、今回の投書では、男女それぞれともに割合として高く、大企業の経営破たんが、家族や身内、知人という「身近な関係」に目を向けざるをえない機会となったのだろう。今回、言及される身内に関してみられる特徴は、男性の場合は、息子、あるいは子供のことであり、一方、女性の場合は、圧倒的にその人の主人が多く、次に、母があげられている。この傾向は、戦後の投書の傾向についても同様であった。男性は、子供のことはいえても、妻のことを人前で語ることにためらいを感じているが、女性は、「主人」のことを人前で語るのをはばからないということが確認できる。この身内への言及の男女差は、わが国の性別役割分業関係に裏打ちされたジェンダーが家族関係への反映の一つの特徴と考えているのだが、いかがであろうか。興味深い問題である。

以上、戦後 40 年間の投書の文体との関わりでまとめてみると、今回の場合、男性は典型的な男らしい文体をより多用し、女性は典型的とまではいかないが、女らしい文体を使用しているといえる。戦後 40 年間その性差が縮まってきているとはいえ、今回の投書には、文体のジェンダーによる差がより顕著に表れている。これは、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業で成り立ってきたとみられる大企業の経営破たんという大事件が、投稿者をはじめ多くの日本人に他人事とはおもえない衝撃となって響き、これを切っ掛けに自己のうちに根強

く生きづいていたジェンダー意識、ないし観念が投書の文体のなかに表出されたものではないかと思われる。高度経済成長期に形成されたジェンダー意識存続の危機感ともみえてくるのである。

5. 山一証券をめぐる投書の内容の分析

この章では、今回の投書について、さらに詳しく、その内容についての分析を行なってみたい。今回の投書では、大企業の経営破たんについて書かれている中で、内容は多岐に渡っているが、次の3点が特に目立っていた。

- ①企業、政府、政治／マスコミ報道等への批判
- ②個人的体験
- ③社員やその家族への同情／励まし

これらをだまかに数字としてまとめると、以下の通りである。ただし、ここでは、一つの投書につき、一つの内容ということだまめたわけではないことをお断わりしておきたい。

	男性	女性
①批判 政治／企業 マスコミ等	27 3	2 3
②個人的体験	6	6
③社員やその家族 への同情／励まし	3	12

上の数字から示唆されてくることは、男性側は政治や企業の経営批判を行ない、女性側は社員やその家族を励ましているということである。第3章でも述べたが、投稿者の年齢、職業、あるいは、当事者等についてさらに考え合わせてた上で、投稿者の典型を描いてみると、仕事の第一線からしりぞい男性が、第三者の立場から、政治・企業への批判をし、他方、働き盛りの夫を持つ女性が、当事者あるいは、失業者を抱えた家族の気持ちに共感し、励ます（合う）という構図として顕れてくる。この関係は投書を通して、現在の日本の男女をめぐる状況を示しているように思われる。

以下、その投書の内容の一部を抜粋しながら、具体的に考えてみたい。なお、抜粋部分のはじめにあるのは、投書の見出しであり、カッコ内は、投稿者の性別、職業、年齢である。その後に、掲載された新聞名、掲載月日を提示している。できるだけ、男女それぞれの投書を取り上げている。

(1) 「批判」をめぐるもの

大半は、安易な公的資金導入への批判、チェック体制の甘さ、企業経営者や政治、政府への批判が書かれているもので、特に、男性の投書に多くみられた。

- ・「山一への公的資金導入は甘えだ」(男性、会社員、46歳)『毎日』11.28
政府や金融・証券界には、「住専処理」の反省よりも「前例」への甘えがあるのではないか。
- ・「蔵相の言葉信じない預金者」(女性、主婦、56歳)『読売』12.4
政治家や官僚には、机を離れ、金融機関のロビーに来て、客たちがどんな不安を抱いているか、その会話に耳をかたむけてもらいたいと思う。

その他、山一証券破たんに関する報道のしかた(インタビュー等)についての批判や、山一証券が大企業ゆえに優遇されていることを指摘するものがあった。

- ・「変わらぬテレビ取材の無神経さ」(男性、会社員、41歳)『毎日』12.2
山一破たんのニュースでは、手や、持っていたカバンでマイクを振り払う人の姿が映し出された。私はメディアによる「いじめ」そのものだと感じた。
- ・「倒産・中小企業の社員もいる！」(男性、無職、64歳)『毎日』12.20
本紙の報道によると、山一証券の社員には約1300社、1万6000人の求人があったという。(中略)だが、一生懸命に働いてある日突然「倒産」を知らされ、退職金すら出ない中小の社員がいることも忘れないでほしい。

(2) 「個人的経験」をめぐるもの

企業の経営破たん、リストラ、倒産にまつわるものや、山一証券の客であったり、株を購入したりしたことなどが述べられている。前者は男性が、かつて

の自身の苦い経験から、後者は女性が、消費者としての立場から、それぞれ述べているものが多いことが特徴的である。女性の場合、自身の夫が勤めている会社のことも話題にしていたものもあった。

- ・「破たんの責任 私財提供せよ」(男性、元信組専務理事、63歳)『朝日』12.18
私事で恐縮だが、二十年ほど前、信用組合の役員をしていたときのこと。不良債券が多くて、自助努力ではどうにもならず、預金保険機構、全信組連と某銀行にお世話になった。そのとき、知事に財産を提供するように言われ、私財全部(当時三千万円相当)を提供し、裸一貫になった。某銀行にあとを引き継いでもらい、従業員は一人も首にせず、役員は全員退職した。当時、私は四十二歳、子供三人を抱え、死にものぐるいで働いた。
- ・「取引で感じた社員の親切さ」(女性、公務員、30歳)『朝日』11.26
私は、今回の事件をまるで我がことのように受けとめています。といいますのも、就職以来、ずっと山一証券のお世話になってきたからです。

「個人的経験」をめぐる、その投書での位置について、興味深い特徴がある。男性の投書の展開の特徴は、かつての自身の経営破たん等の経験を述べることで、今回の経営破たんに関して、政治や企業に対する批判に向けている点である。一方、女性の場合、一消費者として、山一証券、あるいはその社員との出会いを語りながら、特に経営破たんによる社員のその後のことを案じる内容に展開していく傾向にある。

(3) 「社員への同情／励まし」をめぐるもの

会社が破たんすることも全く知らされず、もくもくと働いてきた社員、あるいは、そういう立場のサラリーマンへの同情や共感、あるいは、かつて、株購入時にお世話になった社員への気遣いを述べているものがあり、特に女性の投書に多くみられる。

- ・「まことに悲しいサラリーマン」(男性、会社員、34歳)『朝日』11.28
苦しいときには容赦なく切り捨てられ、いろいろ組織の最後を迎えたとプライドさえもはぎ取られる。サラリーマンのいかに悲しいことか。
- ・「会社存続考えて違法行為するな」(女性、主婦、41歳)『毎日』11.30
ほとんどの社員は、何事も知らされずに、一生懸命会社のために働いた

人ただ。それがあつた日突然、関連グループを含めると、約1万人近くの人があつ職するといふ。(中略)でないと、一生懸命会社のために日夜働いてる社員が余りにも哀れだ。

男性よりも女性の方が、つらい立場、弱い立場にある人を励ますこと傾向にあることが今回の調査からもわかる⁽⁹⁾。現代社会にあつて、女性自身が必ずしも安定した立場にはなく、悩み、苦しんでいる人や状況に、より反応しやすくなつてるといふことに起因しているのかもしれない。

今回の投書では、社員あるいは、その家族への励ましへの表現に関して、女性の投書に圧倒的に多くみられたことが、特徴的である。その中でも、「がんばつて」といふ表現が女性からのものに、8つ(女性の全投書のうちの34.7%)あつた。男性からのものには、一つもなかつた。また、励ます対象は、第3章でも取り上げたが、女性の場合、自身の主人、知人の夫、あるいは、妻、または社員や社員の妻・家族などであり、男性の場合、自身の息子らしい人(投書では「あんた」と表現している)に呼びかけているのもの一つだけである。繰り返すことになるが、今回の投書において、男性が、自身の妻、知人の妻、社員、社員の夫等を励ますことはほとんどみられない。男性にとって、投書において、誰かを励ます行為はジェンダーとしての自分を越えることなのであつらうか。以下に示す「励まし」の文面は、女性の投書に特徴的にみられるものである。

- ・「苦難乗り越え新天地開け」(男性、無職、80歳)『朝日』12.3
山一社員を身内に持つ人々にとつても、全くの青天の霹靂。自転車を飛ばして駅売りの新聞を購入。(中略)さて、これからの人生、悔いのない人生は本当の人生ではない。山一出身を誇りとして新しい天地を開いてもらいたい。風邪ひくな、元気で。
- ・「山一こけても家族は負けぬ」(女性、主婦、35歳)『朝日』11.26
「先のことは、まだわからない。今は、だた、会社と自分を信じて、お金を預けてくれたお客さんのことだけだ」と、二十五日朝も、いつも通り出勤していった夫。(中略)「さすが、山一出身者は違ふなあ」つて皆に言つてもらえるように、頑張つて行くだけだよ。
- ・「家族の皆さん がんばつて!!」(女性、主婦、44歳)『朝日』11.27
二十六日声欄の「山一こけても家族は負けぬ」の、松原樹世美さんの文面を見て、思はず涙しました。(中略)健康第一、しっかりとごはんを食

べて、ネ、がんばって!!

- 「山一メディアの母よ頑張って」(女性、主婦、33歳)『朝日』12.18
私の母は山一証券の契約社員で、今回の突然の破たん、食事までできないほど落ち込んでいます。(中略)母は幸い生活には困りませんが、失業で困っている同僚も何人かいるようです。「逆境にめげずに頑張って」としかいえませんが、早くいつもの張り切り母さんに戻ってほしいと願っています。
- 「がんばれ 山一の妻たち」(女性、会社員、52歳)『朝日』『ひととき』12.10
連日の山一ショックの報道の中で、ご主人が山一証券に勤めている友人のことが気がかりだった。(中略)国はいま一つ当てにならないけれど、山一の妻たちよ、がんばっていこう。

さらに、感情表現としての「涙」について、ひとこと述べておきたい。山一証券自主廃業の発表の際に、社長が号泣したということもあって、「涙」がいつになくクローズアップされたが、投書の中では、女性からのものには、使われていなかった。例えば、「～を見て思わず涙しました」「破たんのニュースに涙が止まらなかった」というように。今回の出来事をめぐる投書を通して、私は、突然の大事件に「涙」し、さらに、「がんばって」と励ますのは、女性ならではの表現の仕方なのではないかという印象をより強く持った。

(4) まとめ

今回の投書の内容の傾向とその特徴をあらためてまとめてみれば、男性は、政府、政治、企業など公的な領域での発言を、女性は、家族関係や個人的関係などの私的な領域での発言を中心に展開している。個人的経験を述べる場合にも、男女によって差があったということも、指摘できる。さらに、男性は批判し、女性は励ますという、性別役割の違いが見事にみとれることである。なお、男女共に共通していえることは、当事者からの、会社や政府、政治に対する意見、批判があまりみられない点である。批判があっても、あくまでも第三者の立場からであり、自分自身の勤めていた会社への批判もなされていない。かつての苦い経験(会社の危機、失業)についても、自分が勤めていた会社が破たんした原因をクールに追求し、検討していくという観点から語っている姿勢のものはほとんどない⁹⁾。

さらに、前述したような女性投稿者による「励まし」も、ただ単に「がんば

ろう」というエールばかりが目立ち、会社をめぐる社会的・政治的視点や、具体的な方策や根拠もなく、だたやみくもに励ましているという印象をうける。以下に具体例の幾つかを紹介しておきたい。

- ・「試練は、それを乗り越えられる人間にだけ与えられる」という言葉をどこかで聞いたことがある。(女性、主婦、32歳)
- ・人生って、本当にいろんなことがあります。何がいい、何が悪い、は別にして、松原さんの元気なことばに、きっと多くの人たちが励まされたことと思います。(女性、主婦、44歳)
- ・それぞれの場所に必ず幸せは見え出せる、そんな気がしています。(女性、主婦、36歳)

これらの例にみるように、特に「主婦」という立場にいる人の多くが、このような励まし方をしている。確かに、このような表現は、時には、「励まし」になるし、支えにもなるだろう。

だが、一方において、伊藤雅子(1983:188~93)の指摘を思いおこさずにはおれない。伊藤は、「主婦」の投書に、ある傾向を見いだしている。それは、「自分だけの思いにとどまっていて、客観的事実はどうかという目で見ようとはして」おらず、「心がけの持ちようで問題を解決しようとする姿勢、解決できるという思いこみ」で書かれる傾向があるとしている。伊藤の分析した投書は、今回の投書とは全く関係のないテーマであり、また15年前のものであるが、今回の投書の、特に「主婦」からの励ましに、「心がけの持ちよう」を強く感じるのは、全くの偶然ではないだろう。

おわりに

本稿では、山一証券自主廃業をめぐる投書の文体、内容をジェンダー視点から、分析を行なった。その結果、文体のみならず内容にもその性別役割分業体制を前提とするジェンダーの特徴が見えてきたことが分かったが、高度経済成長が望めなくなった日本社会の今後、それがいかように変化していくか、さらに調査していきたい。

余談だが、山一証券静岡支店閉店時の、顧客のインタビュー記事にもジェンダーの影がみえてくるようだ。(『朝日』1998 2.28)

「親の代から山一を利用してきたから寂しくなるねぇ」（男性、会社員、52歳）

「社員は最後まで親切だった。再就職は大変そうだけど、頑張っしてほしい」（女性、主婦、40歳）

補足（当事者からの投書）

本文において述べてきたように、当事者、つまり、山一証券に勤めている社員からの投書はほとんどなかったが、調査期間中に、女性だけが投稿できる「ひととき」欄（『朝日』）に、女性社員の投書が一件（「会社が倒れようとも」1997年12月4日付）、それと、調査期間後に、同じく「ひととき」欄に一件、また、「声」欄（『朝日』）に男性からの一件（ともに元社員）の投書があったので、それらを一部紹介したい。

はじめの投書の女性は、46歳で、山一証券に15年間勤めてきた人である。10年前に夫を亡くしたことも添えられている。一部抜粋したい。

入社当時からどんな状況のときもお付き合いをしてくれたお客様に、「テレビで見ていらっしゃると思うんですが」と電話を入れた。相手の声を聞いたとたん、涙が出た。自身の損失も顧みず励ましてくれるお客様の温かさに泣き、旧経営陣への怒りに泣いた。（中略）多くの方々に迷惑をかけ、今は紙切れのようになった会社だが、私はこの会社をいとおしみながら、強く生きていきたい。

そこには、「旧経営陣への怒り」とともに、自身を励ましてくれる顧客との関わりが綴られている。この同じ女性が、再就職をはたした五ヵ月後、「声」欄（『朝日』）に投稿している。「元山一の仲間 がんばろうね」（1998年5月8日付）という見出しで、「山一証券時代の顧客のT様からのお便りの歌に励まされた」こと、そして、その歌を元同僚に送りたいという内容である。一部抜粋したい。

……寛大で優しいお人柄に、乾いた目に再び涙がにじみました。（中略）まだつらいとか思うほどの余裕もありませんが、これからの道のりに困難を感じたとき、心に刻んだこの歌を励みに頑張っていこうと思います。

この女性の投書にも、「涙」と「頑張る」ことが書かれているのが特徴的である。

企業の経営破たんや不祥事等の面目丸潰れの状況にあって、当事者から投稿することは、勇気のいることだろう。特に、川人(1998)も述べているように、自分より権力のある存在、たとえば、ここでは会社や経営陣、を批判することは、日本社会において、「出る杭は打たれる」ような社会的制裁をうけかねない。今回の当事者からの投書は、女性からのものということもあってか、会社批判というより、むしろ、「顧客との温かい関係」を中心に綴られている。

さらに、当事者の投稿のプロセスから示唆されてくることがある。『朝日』についてのみであるが、今回、当事者は、まず、女性だけが投稿できる「ひととき」欄に出し、再就職を果たした五ヵ月後、男女ともに投稿できる「声」欄に出している。このプロセスを私なりに分析してみると、最初は、同性に向けて書きながら、自身の気持ちの整理をする。その後、再就職をするなど、気持ちに余裕ができた段階で、男性にも向けて、元同僚へエールをおくる。

男性の当事者からの投書が、1997年度段階でなかったということは、どう考えたらよいただろうか。「男は、弱音をはかないこと、泣き言をいわないこと」といった社会的なしぼりのようなものが、自身の感情をさらけだす、あるいは、自己の弱さを表現することの制約となっていると解釈できないだろうか。

今回の出来事から一年後の、1998年12月29日付(『朝日』)に、41才の男性社員による投書が、「山一から転身責任ずっしり」という見出しで、掲載されていた。そこには、会社批判は当然のように見当たらないが、解雇されてからの職さがしの苦勞や、第二子が生まれてくることを知った時の戸惑いと責任の重さが切々と書かれている。この投書には、今回調査した男性の投書にはない、「妻」への言及があったのが印象的である。

注：

(1) 主な新聞の社会面の特集記事は、以下のような見出しで組まれていた。

『朝日』「会社あしたは」、「読売」「失業ビッグバン」、「毎日」「会社が消える」

『産経』「会社消滅」、「日経」「企業消失」

ちなみに、山一証券自主廃業をめぐる社会面の報道に関するジェンダー視点からの分析については、拙稿(1999)「新聞の社会面をジェンダーで読む」を参照されたい。

(2) 差し当り、ジェンダー問題に関しては、私は、金井淑子(1997:142)の、次のような発言を受容している。「ジェンダーと言いますと、なかなか分かりづらいかもしれませんが、別の言葉で言うと、性別役割分業の関係であり、性別役割分業のシステムです。性によって社会的な役割の線引きが行なわれています。(中略)『女は内で男は外』という社会的な規

範＝ジェンダーの規範がある。ジェンダーによって、つまり、男・女という性差によって、社会のシステムのところに垣根がつくられているのです」。日本の高度経済成長は、この金井の言う「女は内で男は外」という性別役割分業を支えに発展してきたことを、落合恵美子（1994：19）も述べている。彼女は、詳しい実証データをもとに、「戦後、女性は社会進出した」のではなく、「戦後、女性は家庭に入った」とも主張している。高度経済成長が、男性のサラリーマン化と女性の専業主婦化という分業によって、展開されてきたことが示されている。

- (3) 佐竹（1995：54）において、公的なテーマと私的なテーマの投書を以下のように定義している。

公的なテーマの投書

新聞の記事をはじめ、マスコミで報道された社会的・政治的・経済的・国際的な問題や事件について論じ、見解・批判・抗議・要望・提案などを述べるもの

私的なテーマの投書

身のまわりの出来事や体験、自然・風物や折にふれての思いを随想風に述べるもの。日常生活のマナー、ことばづかい、実用的なアイデア、健康法、人生観などについて述べるものもここに含める

- (4) その際、一紙に絞ったのは、複数の新聞を比較するには、あまりにも様々な要因(例えば、編集上の方針)がからんでいる可能性も払拭できなかったためであり、さしあたって、限定して調べてみた。
- (5) 「私」「思う」をめぐって追記しておこう。以下の例において、a) の場合よりも、b) の場合の方が、主張の強さが感じられると解釈されている。

a) 私は、今回の処置は間違っていると思う。

b) 今回の処置は間違っている。

私自身、英語の論文においても、「I think」という表現を避けるようにと指導された経験がある。一人称の使用については、日本語の場合、様々な議論があるが、ジェンダー視点からも指摘されている。(この点については、上野千鶴子(1993：76～77)を参照されたい)「思う」という語彙同様、意見主張タイプの投書では、使わない方が、むしろ説得的に響いてくると考えられている。

また、「私」「思う」という語彙の使用に関して、投書ではないが、興味深い指摘がなされているので、ここに紹介したい。吉本ばななの『キッチン』という小説の冒頭に、以下のような文がある。

私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。

加藤典洋(1996:157~59)によると、この文をめぐる、「ある詩人で文芸評論家でもある人」が、「好き嫌いとは完全に主観の問題だから『と思う』もくそもないわけで、『である』と断定して構わないはずである。」と怒っていると紹介している。さらに、「私が」の部分に関しても、主語と述語の対応がみられず、座りの悪い表現になっていると指摘しているという。加藤は、そのような批判に対して、この冒頭部分の文の意義について、氏なりの説明を試みている。私の興味は、「ある詩人で文芸評論家」が、多分男性であり、それゆえ上述のように反応したのではないか、ということにある。この「私」と「思う」の語彙の使用に関しては、投書以外でも、ジェンダー問題にかかわる事柄としておさえていく必要があるのではないかと考えている。

- (6) なお、話し言葉では、特に、女らしい言葉遣いは、丁寧であると考えている人が少なくないが、これは、佐竹(1998)での学生アンケートにおいても、顕著にみられる。女らしさの一つの規範として、言葉遣いの丁寧さが、今でも健在であることが表れている。
- (7) ()内は、投書の中で言及された人のことである。
- (8) 大学のあるクラス(3~4年生対象、男性17名、女性33名)において、結婚生活がうまくいかなかった女性からの投書(「私の結婚生活」『毎日』1996年4月13日付)を読み、感想を述べてもらったことがある。詳細は省くが、共感や励ましについての表現は、男性では、5.8%の人しか述べていないのに比べ、女性では、54.5%の人が述べており、ジェンダーによる差がここにも見られる。この場合、テーマが「結婚生活」という、女性により関心のあるテーマであったことも考慮しなければならないだろうが。
- (9) これは、日本の現在おかれた状況が、見事に投書にも映しだされていることが分かる。川人博は、『過労自殺』(1998:85~6)の中で、過労自殺の場合の遺書についてふれている。そこでは、「申し訳ない」「すまん」というおわびばかりで、「自らを死に追い込んだ会社に対する抗議の言葉」が書かれていないと指摘している。会社人間として、会社への疑問も怒りも飲み込み、ひたすら歯車となって働くことのみ期待されている、日本の経営に根ざした会社組織、ひいては、日本社会の状況が、今回の投書に反映されているといえる。

参考文献：

- 伊藤雅子(1983)『主婦的話法』未来社。
金井淑子(1997)『女性学の挑戦』明石書店。
加藤典洋(1996)『言語表現法講義』岩波書店。

- 川人 博 (1998) 『過労自殺』 岩波新書。
- 熊谷滋子 (1996) 「女の文体の移り変り」『人文論集』静岡大学人文学部、第 47 号の 1、263-275。
- 熊谷滋子 (1997) 「投書とジェンダーをめぐる」『人文論集』静岡大学人文学部、第 48 号の 1、345-362。
- 熊谷滋子 (1999) 「新聞の社会面をジェンダーで読む」篠原三郎・中村共一編著『市場社会の未来』ミネルヴァ書房。
- 国緒英子 (1987) 「投書のパタンと表現」『言語生活』10月号、筑摩書房、40-46。
- Lakoff, Robin (1990) *Talking Power Basic Books*.
- メイナード、泉子、K (1997) 『談話分析の可能性』くろしお出版。
- 落合恵美子 (1994) 『21 世紀の家族へ』有斐閣選書。
- 佐竹久仁子 (1995) 「女の文体・男の文体」『ことば』16号、現代日本語研究会、52-68。
- 佐竹久仁子 (1998) 「女ことば／男ことば」規範をめぐる『ことば』19号、現代日本語研究会、53-68
- 田中和子・諸橋泰樹 (1996) 『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて』現代書館。
- 上野千鶴子 (1993) 『ミッドナイト・コール』朝日文庫。
- 吉本ばなな (1991) 『キッチン』福武文庫。

参考例：

① 女らしい文体の投書

「触れ合い喜ぶ乳児たくましく育てて」(主婦、28歳)『朝日』昭和60年10月31日二十二日付「乳児にふれないで」の藤井真紀子様、私もあなたと同じ年で、来月二歳になる女兒が一人、核家族の専業主婦です。ご投稿を読み、少し前の自分を思い出しました。何もかも初めての子育て、病気感染なども心配ですが、どうぞあまり神経質にならずに、お子様と周りの人との出会いを見守ってあげたら、と思います。

子どもは、私も育ててみて初めてわかったのですが、生命力の強いすばらしい存在です。ほとんどの子どもは肌と肌の触れ合いを喜びます。たとえ、店先で会うアカの他人でも自分をかわいいと思ってくれることがわかると、うれしそう。喜びや幸せな気持ちを知っていきます。少しくらいの風邪はどんなに大事にしてもいくらでもひきます。そして、子も親もたくましくなる気がします。

親がいくら注意しても、これからはスリッパをなめたりゴミ箱をひっくり返したり。私もやっと黙ってながめられるようになったところです。肩の力を抜いて、がんばりましょう！

②男らしい文体の投書

「自民党首脳の危険な防衛論」（無職、67歳）『朝日』昭和60年10月5日

本紙によると、自民党の金丸幹事長は「狭い日本に戦場が必要か」「一週間ぐらい水際で抵抗すれば米国が来援する」と言い、藤尾政調会長は「核、ミサイル時代に対応し、海岸線より遠い所でとらえ、上陸させない防衛体制」を強調する。いずれも、ソ連の日本上陸を想定しての防衛論議である。

だが、米ソのいずれにとっても極東のとりでに位置する日本列島へのソ連上陸は即、米ソによる日本列島の争奪戦として戦端火を吐くことは明らかである。「一週間ぐらい……」「海岸線の遠くで……」という単純なこの防衛発想は、一体どこから生じたのであろうか。まして「狭い国土に戦場が必要か」に至っては、何をか言わんやである。

日本列島こそ、極東における米ソ攻防の最前線であり、主戦場となることは、アメリカ国防当局が証明する。「五九中業の達成により、日本は米国の世界戦略の一環となる」と。そしてその勝敗の帰趨（きすう）のいずれかを問わず、戦いすんで日が暮れて、焦土化され日本列島に屍（しかばね）が山をなすことは、覚悟せねばなるまい。

「ソ連が攻めてきたら」という防衛論議が軍拡への布石であり、あるいは遠い日清、日露の戦勝への淡い郷愁からであるとしたら、日本国民の悲劇である。